

This Page Is Inserted by IFW Operations
and is not a part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

**As rescanning documents *will not* correct images,
please do not report the images to the
Image Problem Mailbox.**

⑨ 日本国特許庁(JP)

⑩ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A) 平3-103995

⑤ Int. Cl.⁵

識別記号

庁内整理番号

④ 公開 平成3年(1991)4月30日

G 06 K 7/00

S

6945-5B

審査請求 未請求 請求項の数 2 (全6頁)

⑬ 発明の名称 定置式バーコードスキャナー

⑭ 特 願 平1-242841

⑮ 出 願 平1(1989)9月19日

⑯ 発 明 者 三 枝 慎 治 静岡県三島市南町6番78号 東京電気株式会社技術研究所
内

⑰ 出 願 人 東京電気株式会社 東京都目黒区中目黒2丁目6番13号

⑱ 代 理 人 弁理士 鈴江 武彦 外3名

明 細 書

1. 発明の名称

定置式バーコードスキャナー

2. 特許請求の範囲

(1) 光ビームを複数方向に走査してバーコードを読取り解読して転送する定置式バーコードスキャナーにおいて、1回の読取り操作においてバーコードを正しく解読した回数を記憶する解読回数メモリと、読取り操作終了後に前記メモリの内容を報知する報知手段を設けたことを特徴とする定置式バーコードスキャナー。

(2) 光ビームを複数方向に走査してバーコードを読取り解読して転送する定置式バーコードスキャナーにおいて、1回の読取り操作においてバーコードを正しく解読した回数を記憶する解読回数メモリと、読取り操作終了後に前記メモリの内容を報知する報知手段と、光ビームがどの方向を走査しているときに解読が行われたかを検出する走査方向検出手段と、この検出手段の検出結果を記憶する走査方向メモリと、前記各メモリの内容に基

づいて読取り不能領域の近傍で読取りが行われているか否かを判断する判断手段と、この判断手段が読取り不能領域の近傍で読取りが行われていることを判断すると警告する警告手段を設けたことを特徴とする定置式バーコードスキャナー。

3. 発明の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本発明は、光ビームを複数方向に走査してバーコードを読取り解読して転送する定置式バーコードスキャナーに関する。

〔従来の技術〕

定置式バーコードスキャナーの読取り走査線(光ビーム)は一般に第6図に示すようなダイナミッククロスパターンが採用されている。すなわち図中実線で示す水平読取面1と図中点線で示す垂直読取面2に対して中央水平走査線a、側方水平走査線b及び鉛直走査線cが図示の関係になっている。

このダイナミッククロスパターンは第7図に示すように、バーコード面3の仰角 θ 、バーコード

面3の回転角 α 、物品4の移動方向 d 等のバーコード読取りパラメータに対して各読取走査線 a 、 b 、 c が読取り領域を分担して読取りが行えるように最適化されている。

すなわちダイナミッククロスパターンによる読取りの評価マップは仰角 β 、回転角 α の関係から第8図に示すようになり、図中斜線で示す仰角 β が小さく、回転角 α が大きい部分で読取が困難もしくは読取不可能な領域が存在する。またこれを各走査線 a 、 b 、 c 毎に分けて評価マップを示せば、中央水平走査線 a については第9図の(a)に示すようになり、側方水平走査線 b については第9図の(b)に示すようになり、鉛直走査線 c については第9図の(c)に示すようになる。なお、第9図においても図中斜線で示す部分は読取が困難もしくは読取不可能な領域である。

そしてこれから第8図における読取が困難もしくは読取不可能な領域の近傍を読取るのは側方水平走査線 b と鉛直走査線 c であることが分かる。

そして従来の定置式バーコードスキャナーは、

- 3 -

定置式バーコードスキャナーにおいて、1回の読取り操作においてバーコードを正しく解読した回数を記憶する解読回数メモリと、読取り操作終了後にメモリの内容を報知する報知手段を設けたものである。

請求項(2)対応の発明は、さらに光ビームがどの方向を走査しているときに解読が行われたかを検出する走査方向検出手段と、この検出手段の検出結果を記憶する走査方向メモリと、解読回数メモリと走査方向メモリの内容に基づいて読取り不能領域の近傍で読取りが行われているか否かを判断する判断手段と、この判断手段が読取り不能領域の近傍で読取りが行われていることを判断すると警告する警告手段を設けたものである。

〔作用〕

このような構成の本発明においては、1回の読取り操作によって何回バーコードが正しく解読されたかを知ることができる。従って正しく解読される回数が少なければ読取り操作が適正に行われていないと判断することができる。

- 5 -

バーコードの読取りが成功したか否かを判断し、例えば成功した場合には音によってオペレータに知らせるものであった。

〔発明が解決しようとする課題〕

しかしこのように単に読取りの成功を音で知らせるものでは、読取りができたことは分かってオペレータの読取り操作が果たして適正であるか否かについては把握が困難であった。すなわち読取面に対してバーコードを適正な角度で操作しているか否かを判断できなかった。このためオペレータはスキャナー操作に習熟するために時間がかかる問題があった。

そこで本発明は、オペレータのバーコード読取り操作が適正であるか否かをオペレータに知らせることができ、これによりオペレータのスキャナー操作の習熟を早めることができる定置式バーコードスキャナーを提供しようとするものである。

〔課題を解決するための手段〕

請求項(1)対応の発明は、光ビームを複数方向に走査してバーコードを読取り解読して転送する

- 4 -

また解読が行われたときに光ビームがどの方向かを検出して記憶し、この記憶した方向と解読回数によって読取り不能領域の近傍で読取が行われていることが分かると警報してオペレータに知らせる。従ってオペレータが適正な操作を行っていないければ警報により知ることができる。

〔実施例〕

以下、本発明の一実施例を図面を参照して説明する。

第1図は外觀を示す斜視図で、筐体1の上面中央には読取窓2が設けられ、その読取窓2の側方には解読回数を報知するための報知手段としての5個のLED(発光ダイオード)3a、3b、3c、3d、3e及び読取り不能領域の近傍で読取が行われていることを警告する警報手段としてのLED3fが設けられている。前記LED3aは解読回数が6回以上のとき点灯し、前記LED3bは解読回数が5回のとき点灯し、前記LED3cは解読回数が4回のとき点灯し、前記LED3dは解読回数が3回のとき点灯し、前記LED

- 6 -

3 e は解説回数が2回のとき点灯するようになっている。

第2図は要部回路構成を示すブロック図で、マルチスキャニング光学系11は光ビームのダイナミッククロスパターンにより読取面2上を操作により通過する物品からバーコードを読取るようにしている。

前記光学系11で読取られたバーコード信号は信号処理回路12でデジタル信号変換が行われた後デコーダロジック13に入力されて解説されバーコードデータに変換されるようになっている。

前記デコーダロジック13からのバーコードデータはマイクロプロセッサ14で送信用に組み立てられインターフェース15を介して例えば電子キャッシュレジスタ等のホストに転送されるようになっている。

前記マイクロプロセッサ14は前記マルチスキャニング光学系11を駆動制御すると共にメモリ部16及び出力ポート17を介して表示器18を制御するようになっている。前記表示器18は前

- 7 -

この処理をタイマーが1秒をカウントするまで行い、1秒が経過するとカウンタCTのカウント回数に基づいて表示器18を制御しLED3a~3eを選択的に点灯し、カウンタCTをクリアするとともにホストへのバーコードデータの転送禁止を解除するようにしている。

このような構成の本実施例においては、マルチスキャニング光学系11によってバーコードが読取られ、そのバーコード信号が信号処理回路12を介してデコーダロジック13に入力される。そしてデコーダロジック13で解説されて得られたバーコードデータがマイクロプロセッサ14に取り込まれる。

マイクロプロセッサ14はデコーダロジック13から取り込んだバーコードデータが2回連続して同一のとき正しいバーコードデータと判断しデータを送信用に組立ててホストへ転送する。そしてカウンタCTのカウント内容を「2」に設定するとともにホストへのデータの転送を禁止する。

この状態でタイマーを動作させ1秒間デコーダ

- 9 -

記各LED3a~3fで構成されている。

前記メモリ部16には解説回数メモリとしてのカウンタCTが設けられている。

前記マイクロプロセッサ14は第3図に示す制御を行うようにプログラム設定されている。

すなわちスキャナーが立上るとまず読取りに関する初期設定を行い、続いてデコーダロジック13からのバーコードデータを読み込み、連続して2回同一のデータを読み込むとデータをインターフェース15を介してホストへ転送するようにしている。またカウンタCTの回数を「2」に設定する。

そしてホストへの転送が終了すると以後の転送を禁止し二重転送を防止している。

またホストへの転送が終了するとタイマーをスタートさせてデコーダロジック13からのバーコードデータの読み込みを開始し読み込んだバーコードデータがホストへ転送したバーコードデータと同一のときにはカウンタCTを+1インクリメントするようになっている。

- 8 -

ロジック13からのバーコードデータの取り込みを行い、ホストへ転送したバーコードデータと同一のバーコードデータを取り込んだときにはカウンタCTを+1インクリメントする。従って同一のバーコードデータを取り込むとカウンタCTは先ず「3」となり以降同一のバーコードデータを取り込む毎に歩進される。

1秒が経過すると、マイクロプロセッサ14は表示器18を制御し、カウンタCTの内容が「6以上」であればLED3aを点灯させ、「5」であればLED3bを点灯させ、「4」であればLED3cを点灯させ、「3」であればLED3dを点灯させ、「2」であればLED3eを点灯させる。

従ってどのLEDが点灯するかオペレータが確認することによって何回解説ができたかを知ることができる。従ってその回数により読取面2に対してバーコード面を通性な角度や方向で操作できたか否かを判断できることになる。

これによりオペレータは操作をどのようにした

- 10 -

ら解説回数が増えるかを確認できるので操作の習熟を早めることができる。

次に本発明の他の実施例を図面を参照して説明する。

これはマルチスキニング光学系 11 として第 4 図に示すようにポリゴンミラー 21 を使用し、レーザビームを固定鏡 22, 23 に反射させて中央水平走査線、側方水平走査線、鉛直走査線のダイナミッククロスパターンを発生させるものを使用し、前記各固定鏡 22, 23 の近傍でそれぞれレーザビームが通過する位置に中央水平走査線、側方水平走査線、鉛直走査線にそれぞれ対応して走査方向検出手段の一部を構成するであるフォトディテクタ 24, 25, 26 を設置する。

またメモリ部 16 に第 5 図に示すように 4 個のカウンタ C T₁, C T₂, C T₃, C T₄ を設け、カウンタ C T₁ を解説回数カウント用とし、カウンタ C T₂ をフォトディテクタ 24 がビームを検出するタイミングで解説できたときの回数カウント用とし、カウンタ C T₃ をフォトディテクタ

25 がビームを検出するタイミングで解説できたときの回数カウント用とし、カウンタ C T₄ をフォトディテクタ 26 がビームを検出するタイミングで解説できたときの回数カウント用とする。

なお、どのフォトディテクタがビームを検出したとき解説ができたかはフォトディテクタの出力をマイクロプロセッサ 14 が取り込んで判断し、カウンタをインクリメントするようになっている。

このようにすれば前記実施例同様カウンタ C T₁ によって正しい解説回数をカウントして L E D 3 a ~ 3 e によって報知できる。

またカウンタ C T₁ ~ C T₄ によってどの走査線るときバーコードの解説が正常に行われたか、そしてその回数は何回かを検出できる。

従ってこの各カウンタ C T₁ ~ C T₄ の内容をマイクロプロセッサ 14 が分析して、例えば側方水平走査線や鉛直走査線による解説回数をカウントするカウンタ C T₂, C T₃ のカウント値が 1 以上で、中央水平走査線による解説回数をカウントするカウンタ C T₁ のカウント値が 0 のような

— 11 —

— 12 —

場合には、第 8 図に斜線部分で示す読取り不能領域の近傍で読取りが行われていると判断する。しかもカウンタ C T₁ のカウント値が小さければ不適性な操作が行われていると判断して L E D 3 f を点灯してオペレータに警告する。

こうしてオペレータが不適性な操作を行っているときにはそれを知らせて適正な操作に改めさせることができる。従ってこの場合もオペレータの習熟を早めることができる。

〔発明の効果〕

以上詳述したように本発明によれば、オペレータのバーコード読取り操作が適正であるか否かをオペレータに知らせることができ、これによりオペレータのスキナー操作の習熟を早めることができる定置式バーコードスキナーを提供できるものである。

4. 図面の簡単な説明

第 1 図乃至第 3 図は本発明の一実施例を示すもので、第 1 図は外観を示す斜視図、第 2 図は要部回路構成を示すブロック図、第 3 図はマイクロ

プロセッサによる要部処理を示す流れ図、第 4 図及び第 5 図は本発明の他の実施例を示すもので、第 4 図はマルチスキニング光学系の要部構成を示す図、第 5 図はメモリ部の要部を示す図、第 6 図はダイナミッククロスパターンを説明するための図、第 7 図はバーコード読取りパラメータを説明するための図、第 8 図はダイナミッククロスパターンの読取り性能評価マップ、第 9 図は各走査線の読取り性能評価マップである。

3 a ~ 3 e … L E D (報知手段)、

3 f … L E D (警報手段)

11 … マルチスキニング光学系、

13 … デコーダロジック、

14 … マイクロプロセッサ、

C T₁, C T₂, … カウンタ (解説回数メモリ)、

C T₃, C T₄, … カウンタ

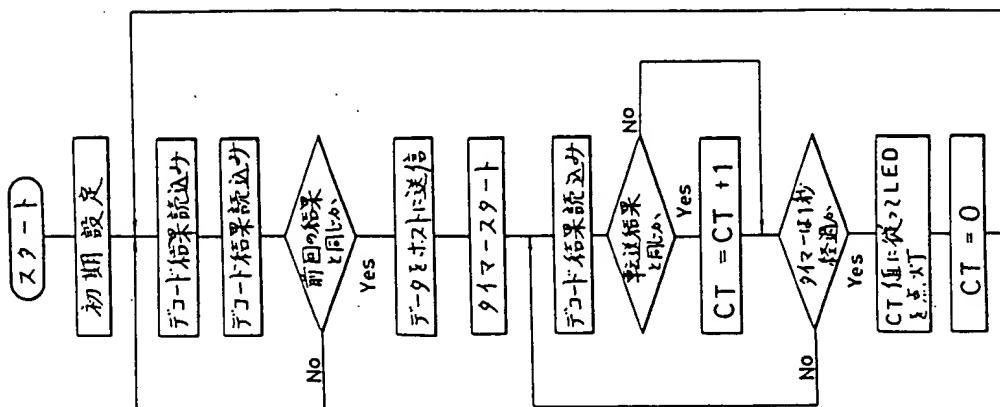
(走査方向メモリ)、

24, 25, 26 … フォトディテクタ。

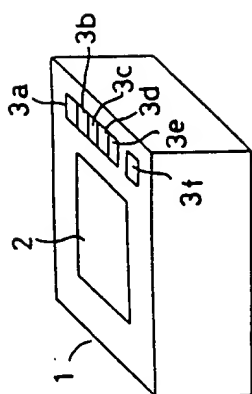
出願人代理人 弁理士 鈴江武彦

— 13 —

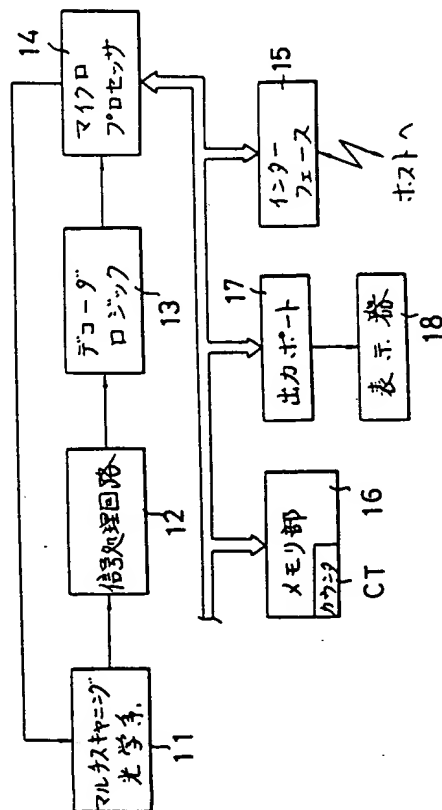
— 14 —



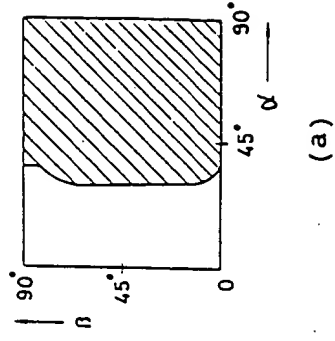
第 3 図



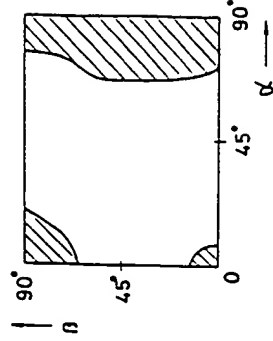
第 1 図



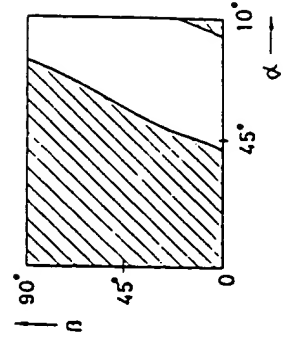
第 2 図



(a)

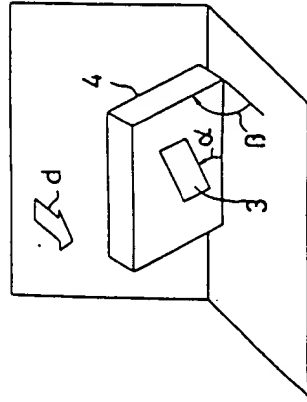


(b)

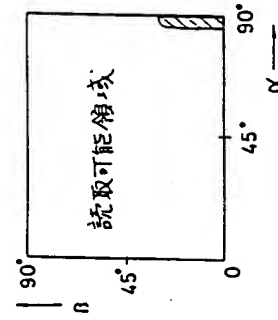


(c)

第 9 図



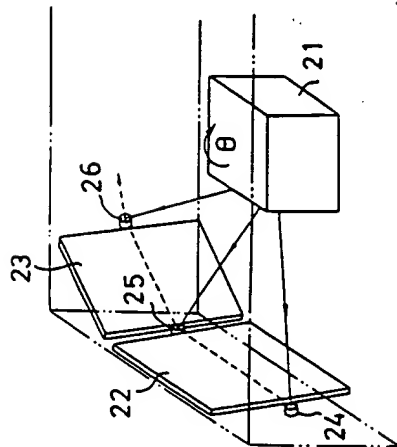
第 7 図



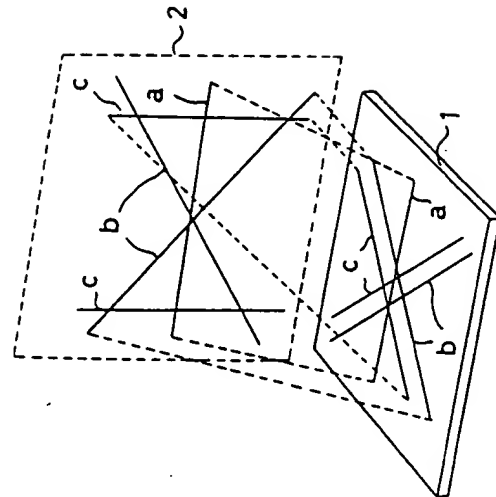
第 8 図

CT0
CT1
CT2
CT3

第 5 図



第 4 図



第 6 図